

敬意と愛にあふれた挨拶

【聖書箇所】 16 章 1～16 節

はじめに

●ローマ人への手紙 16 章は、使徒パウロがローマにある教会に手紙を書き、その最後にパウロが知っている一人一人に対して挨拶を書き送っている箇所です。今回は、このパウロの挨拶から学んでみたいと思います。ここにはローマの教会にいる多くの知人(約 30 名以上)の人に「よろしく」と記しています。手紙の受け取り側にとっては、そこに自分の名前が記されているか否かは大きな関心事です。

●ところで、パウロは一度も行ったことのないローマの教会の信徒たちを、こんなに大勢知っていたのでしょうか。それはパウロが三回にわたる伝道旅行をしましたが、そのとき小アジアのあちこちで救われた人々が当時の主都ローマに移っていたのではないかと考えられます。たとえば、田舎で信仰に導かれた青年が、都会にある大学に進学するために、あるいは就職するために、田舎から都会に来る(行く)ということが多くあります。そうした動きの情報をパウロはよく知っていたのかも知れません。いずれにしても、16 章に見られる挨拶は、しばしば手紙の最初に書かれるような挨拶ではなくて、本当に親しさに溢れています。

1. 互いに挨拶を交わしなさい

●挨拶を交わすということは、私たち人間にとって最も日常的な行為です。昔から不変のしきたりとして定着しています。一日の朝、学校や職場で、道で出会った人に、また久々に会った人に、また電話や手紙によって、人は毎日自然に挨拶を交わしています。ですから、ある意味において、挨拶を交わすということの中に人間関係の最も基本的な姿勢が表現されます。挨拶というのは、相手との信頼関係が生きることのしるしと言えます。ですから、挨拶するということはとても重要です。挨拶ができないと良い人間関係を作っていくことはできません。また挨拶ができなくなる状況があるとすれば、それは危機的な状況です。挨拶は相手との交わりが生きることの確認であり、またその交わりを保っていくための大切なしきたりです。

●パウロはこのしきたりを大切にしました。彼はローマ書 16 章にあるように、名指しでなされる挨拶が、自分と相手の連帯感(信頼感)を表わすだけでなく、よりその信頼感(連帯感)を強めることを知っていた人でした。特に、パウロは福音がローマを中心にしてその働きが拡大して行くことを見抜いていました。ですから、ローマ教会につながっている人々との心のつながりがなくてはそれができないと知っていたのです。ですから、パウロはローマ教会との生きた交わりを固め、あるいは新たに作り出すために出来る限りの心遣いをしていると思います。これは決して打算的なことではなく、よい人間関係を作り出すことがなければ、福音が伝わって行くことがないことをよく知っていたと思われる。

●挨拶をする場合に大切なことは、まず自分から相手に対して心を開くことです。つまり先手を取ることです。挨拶されたら挨拶を返すという態度ではなく、相手よりも先に、自分の方から心を開いて挨拶をするという心構えが大切です。たとえ相手が挨拶を返さなくても、です。

●砂川に人気のある美味しいラーメン屋があります。そこは、いつ行っても人がいないという時がないほどです。確かにその店のラーメンは美味しいのです。しかしそれだけではないものを私は感じました。それは威勢の良い、歯切れの良い挨拶です。もしどんなにその店のラーメンが美味しかったとしても、あの挨拶がなかったとしたら、来る客も途絶えるのではないかと思いました。どんなに味に自信がなかったとしても、謙虚に挨拶すると、お客さんはまた来ようと思ったり、他の人にも紹介しようと思うようになってくるから不思議です。その店の挨拶は、来る一人ひとりのお客を心から大切にしていますというしるしなのです。挨拶が店の繁栄につながっていると言っても過言ではありません。

2. パウロの紹介と挨拶

【新改訳改訂第3版】ローマ書 16章 1～5節

- 1 ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。
- 2 どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。
- 3 キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。
- 4 この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。
- 5 またその家の教会によろしく伝えてください。私の愛するエパネトによろしく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。

(1) 執事フィベの紹介と推薦

●1節から見てみましょう。最初にフィベという人が紹介されています。このフィベは、パウロの手紙をローマに届けた女性の信徒です。パウロはこの女性を紹介し、かつ推薦しています。彼女は、1節を見ると分かるように「ケンクレヤにある教会の執事」です。「執事」というのは教会の世話係です。彼女はパウロのみならず、多くの人を助けた人として紹介されています。おそらく教会の中で、その教会を訪ねてくる人や教会員のさまざまなお世話をした姉妹であったようです。パウロが彼女を推薦できたのは、その働きをある期間見ていたからだと思います。今日でも、単なるテストだけでなく、「推薦入学」の制度や「推薦状」というものがあり、それが重んじられます。たとえば、推薦入学である学生が大学に入ったとしても、その学生がその推薦にふさわしい人物でなければ、もうその高校には推薦入学の枠は与えられません。推薦した高校の信用性が疑われるからです。

●私も神学校(正式には聖書学院)に行く場合、牧師の推薦状が必要でした。そしてその推薦状の持つ重みは大きいのです。私が行った聖書学院では、救われてから少なくとも1年以上経っていることが条件としてありました。なぜなら、他者による客観的なチェック期間が必要だからです。牧師の推薦がもらえるようなチェック期間が必要なのです。

●フィベという姉妹が教会の執事としてパウロが紹介し推薦できたのは、彼女がそれなりの歩みをしてきたからです。当時、女性の地位は社会的には低いものでした。しかしキリスト教会は、神の前に女性の働きをはっきりと認めています。パウロは「どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、助けの必要があればどんなことでも助け」るようと、ローマ教会に進言しています。すばらしい推薦状です。パウロはフィベという姉妹を高くかっていたようです。姉妹を自分の代わりに遣わすことを誇りに思っている様子が伝わってきます。

●教会において、女性の果たす働きは大きなものです。特に、日本においては、どの教会でも女性会が力を持っています。イエシュアの時代でも多くの女性の存在が背後にあって、イエシュアにつき従い、弟子たちのお世話や、食事の世話や、見えないところでその働きを支えていました。ある人は経済的な面において支えていたようです。ある者は母であったり、妻であったり、また独身であったりといろいろですが、いずれもこれら女性の働きが高く評価されています。これからの時代でも女性の働きは教会においてますます重要になることでしょう。

(2) プリスカとアクラ夫妻

●パウロの挨拶を見ると分かるように、自分がすでに知っている者たちに「よろしく」という時に、ほとんどの場合、相手の特徴づける言葉を添えて、敬意をもって挨拶しています。単なる名前の羅列ではないのです。「それではみなさんによろしく」とひとくくりにするような言い方はしてしません。一人ひとりの個性や特色によって覚えられ、名を呼び、敬意が払われているのです。その最初に置かれているのがプリスカ(プリスキラ)とアクラという夫婦です。彼らは夫婦で主に仕えていました。3、4節を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 16章 3～4節

3 キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。

4 この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。

●この夫婦、実はアクラが夫で、プリスカが妻です。なぜこのような順序なのでしょう。聖書の中で6回彼らの名前が登場していますが、そのうちの4回は妻の名前が先に来ています。妻の方が先に書かれているのは、おそらく、プリスカの方が夫よりも重要な働きを担っていたからではないかと考えます。これは建前よりも聖霊が判断された順序です。

●彼らはもともとローマに住んでいましたが、当時のローマ皇帝がユダヤ人追放政策を打ち出したために、ユダヤ人であった彼らはローマを出なくてはならなくなりました。そして彼らはコリントという都会に行き、そこでパウロと出会ったのでした。プリスカとアクラ夫妻とパウロは天幕作りをしながら、一緒に住み、伝道の働きを開始しました。プリスカとアクラはパウロの指導によって真の救いを見出したのです。しばらくして、この夫婦はやがてエペソの町でアポロという有能な人にイエシュア・メシアの十字架の本当の意味や復活の意味を教えて導いただけでなく、自分の家庭を解放して集会を持っていました。いわゆる、今日の「家の教会」といわれるものです。

●また彼らはユダヤ人でしたが、人種の壁を越えて、異邦人との区別を越えた働きをしたようです。自分の好きなタイプだけでなく、偏見を持たずに、さまざまなタイプの人との交わりを恐れずに持つことが必要です。どんなタイプの人でも偏見を持たずに、かかわっていくという勇気が必要です。なぜなら、「神が私たちに与えてくださったものは、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊」だからです。また彼らは、人のためにいのちの危険を冒したとあります。そうしてまでパウロを助けようとしたことがあったのです。彼らはイエシュアの愛を知るだけでなく、その愛に生きようとしていました。ですから、多くの人から慕われたのです。

●いずれにしても、夫婦が同じ信仰に立ち、主に仕えるとき、素晴らしいことがなされるという見本がここにあります。特に、日本においてクリスチャン・ホームが多く作られることは、主のみこころであり、祈りの課題でもあります。クリスチャン・ホームの存在は大きな証しとなるからです。ヨシヤのように、「私と私の家族とは主に仕える」という信仰に立ったクリスチャン・ホームが、たくさん起こされるように祈らなければなりません。主は、二代、三代にわたって、祝福を注ぐことを約束しています。

(3) 私の愛するエパネト

●この人はアジアでキリストを最初に信じた人です。彼の信仰は一時的なものではありませんでした。何十年という長い間、信仰を保ち続けるということ、しかも主の忠実なしもべとして仕えるということは容易なことではありません。信仰をもって洗礼を受けたとしても、さまざまな試練の中で信仰をなくしてしまう人は決して少なくないからです。そんな中で信仰を保ち続けている人の存在は、教会にとって大きな励みです。エパネトはその意味で教会の大黒柱のような存在ではなかったかと推察します。

●他にも、以下のように、パウロは「よろしく」と挨拶をしています。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 16章 6～15節

6 あなたがたのために非常に労苦したマリヤによろしく。

7 私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。

この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです。

8 主にあって私の愛するアムプリアトによろしく。

9 キリストにあって私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスとによろしく。

- 10 キリストにあって練達したアベレによろしく。アリストプロの家の人たちによろしく。
- 11 私の同国人ヘロデオンによろしく。ナルキソの家の主にある人たちによろしく。
- 12 主にあって労している、ツルパナとツルボサによろしく。主にあって非常に労苦した愛するペルシスによろしく。
- 13 主にあって選ばれた人ルボスによろしく。また彼と私との母によろしく。
- 14 アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく。
- 15 フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく。

●さらにパウロは「・・・が、あなたがたによろしくと書いています。」という挨拶を付け加えています。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 16章 21～23節

- 21 私の同労者テモテが、あなたがたによろしくと書いています。また私の同国人レキオとヤソンとソシパテロがよろしくと書いています。
- 22 この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあってあなたがたにごあいさつ申し上げます。
- 23 私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと書いています。市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと書いています。

これほどに、多くの人の名前を記しているローマ人への手紙はとても珍しいと言えます。

1995.8.13